

【ブロッコリー（秋冬収穫）】

①栽培こよみ

月 作型	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
10～11月穫り	△-----○	—————										
12～1月穫り		△-----○	—————									
2～3月穫り			△-----○	—————								

△：播種 ○：定植 ■：収穫 ----：育苗期間 ——：本圃期間

②栽培のあらまし

(1) 播種・育苗

育苗はパイプハウス等の施設内で行い、風通しのよい場所を選びます。育苗方法はエアープルーニング（浮かし育苗）とします。

育苗トレイは、128穴を用います。トレイに培養土を入れて、約500mlを全体に均一に灌水します。水が十分に浸透したら鎮圧、播種穴開けをし、Lコート種子をセルの中心に1粒ずつ播種します。共土で均一に覆土し、底から水が滲み出してくる程度に灌水します。生育初期は培養土の肥料で生育しますが、10日目頃（本葉展開期）からは液肥を追肥します。

灌水はできるだけ噴霧灌水とし、ジョロ・蓮口を使用する場合は目の細かいものを使用します。灌水は午前中を基本とし、1回の量を十分に行います。夕方には表土が軽く乾く程度とし、過湿にならないように注意します。本葉3～4葉で定植適期となります。老化苗は活着が悪くなるため若苗での定植を心がけます。定植前の灌水は、育苗床から搬出する前に十分行います。

(2) 施肥

堆肥は定植約1か月前に施します。苦土石灰は15日前まで、化学肥料は1週間前までに施し、土に馴染ませておきます。追肥が遅れて肥料切れを起こすと花芽分化が早まったり、病害の発生が助長されるので、基肥の化成肥料は速効性肥料に加え、有機肥料か緩効性肥料を施用します。

表1 施肥例 (kg/10a)

肥料名	基肥	追肥	N	P	K
堆肥	2,000				
有機入り化成肥料	200		16.0	8.0	12.0
粒状石灰	160				
B M 重焼燐	40			14.0	
化成肥料		80	12.0	12.0	12.0
油粕	100		2.0	2.0	1.0
合計			13.0	36.0	25.0



(3) 定植

畦幅は 120～140cm とし、水田転換圃場ではできるだけ高畦にします。条間は 40cm、株間 30～35cm の 2 条千鳥植えとし、栽植本数は 10a あたり 4,000～4,500 株です。

(4) 定植後の管理・追肥

定植後、すみやかに灌水を実施します。十分に根部まで水が浸透するまで灌水し活着を促進します。初期雑草の防除は土壌処理剤を使用し、定植前に処理します。中期雑草は茎葉処理剤を畦間に処理するか、追肥と兼ねて中耕除草します。追肥は一度に多く施すより少量で回数を多く施す方が効果は上がります。1 回目の追肥は定植後 20 日頃に、中耕培土を兼ねて条間に施用します。2 回目の追肥は 1 回目から 2 週間後位に株の生育や葉の色をみて調節します。側枝花蕾収穫をする場合は、生育を早めるため頂花蕾収穫後に速効肥料を施用します。生育後半に肥料切れを起こすとアントシアンの発現が多くなり品質低下するので、追肥量を調節します。

(5) 収穫調整

収穫は蕾が米粒よりやや小さめに膨らみ、花蕾が枝ごとに分かれる前を適期とします。気温が上がらない時間に収穫し、花蕾の頂端から 16cm 程度に高さを揃え、茎を切り落とします。

③病虫害防除

病害には耕種防除と薬剤防除を効果的に組み合わせた防除を行います。べと病は予防的な薬剤散布の他、被害植物の圃場外への持ち出しも重要です。害虫はコナガ、アオムシ、ヨトウムシ類が発生しますがトラップ等で発生動向を調査し、発生初期に効果的な防除を行います。また薬剤感受性も低下しやすいので、感受性検定で効果的な殺虫剤を選定します。

④栽培上の留意点

- ・発芽後から幼苗期にかけて低温に遭遇すると、早期出蕾し小花蕾のボトニングとなります。
- ・花芽分化初期に高温になると花蕾の分化が不十分で、小葉の混じったリーフイーとなります。晩秋や春先に高温になったり、温度変化が激しい場合に多く発生します。

出典：「農業新技術百科」（2009 年 兵庫県）

